

第11回 同志社大学グローバル地域文化学会学術講演会

## 戦争体験の継承——哀しみの記憶とあなたの明日

日 時：2023年10月4日（水）15:30 ～ 18:00

場 所：同志社大学烏丸キャンパス志高館110教室

講演者：清水恵子（国立広島原爆死没者追悼平和祈念館朗読ボランティア）

藤井光（アーティスト）

山田朗（明治大学文学部教員）

主 催：同志社大学グローバル地域文化学会

企画・運営：2023年度グローバル地域文化学会学術講演会実行委員会

川西爽登（グローバル地域文化学部アメリカコース [コメント]）

七崎桃子（グローバル地域文化学部ヨーロッパコース）

野崎真羽（グローバル地域文化学部ヨーロッパコース）

藤原花妃（グローバル地域文化学部ヨーロッパコース）

ペレス R. アンドレス（グローバル地域文化学部教員）

邊見海佑（グローバル地域文化学部アメリカコース）

松井琴葉（グローバル地域文化学部ヨーロッパコース [コメント]）

宮島理彩子（グローバル地域文化学部アジア・太平洋コース）

安見日菜子（グローバル地域文化学部アジア・太平洋コース [司会]）

米倉嘉陽（グローバル地域文化学部アジア・太平洋コース）

渡邊 暖（グローバル地域文化学部ヨーロッパコース）

渡辺 文（グローバル地域文化学部教員）

## 1. 開会の辞

**安見** 「戦争体験の継承 哀しみの記憶とあなたの明日」の講演会を始めます。司会はグローバル地域文化学部アジア・太平洋コース3回生の安見日葉子です。はじめにグローバル地域文化学部長の宇佐見耕一先生から開会の挨拶をお願いします。

**宇佐見** 本日はグローバル地域文化学部グローバル地域文化学会講演会「戦争体験の継承—悲しみの記憶とあなたの明日」で3名の講演者に講演していただきます。ありがとうございます。今日の講演会は当学部開設10周年となります。

戦争体験というと日本では、どの家庭でも戦争の悲しみが何らかの形で残っていると思います。私の母方の祖父は40歳を過ぎて子ども7人を残してサイパン沖で戦死しておりますし、父方の家は東京大空襲で被害を受けております。幼い頃母方の実家に行きますと、死んだ、まだ見たことのない祖父の遺影が飾ってありまして、家の中がどことなく哀しみに沈んでいると、幼いながらも感じておりました。そういう戦争の直接の体験を、私の父や母はしておりますし、戦死した祖父の孫である私も父母や、おば、おじから聞いて残っています。グアム島で小野田少尉が発見された時、母が「うちの父親もサイパン沖で死んだけど、どこかで生きているのではないか」という話をしていたのを幼いながらも覚えております。そういう記憶は私までは結構伝わってきて継承されていますが、私の娘になりますと話聞いていても、私ほど直接、重い哀しみはないと思います。

本日のタイトルの「戦争体験の継承」という話と「あなたはそういう戦争体験を聞いて継承して、あなたの明日はどうするか」、明日に向けた話ということも重要だと思っています。私も私なりに自分で、明日に向けて、どう生きていくべきかを常々感じております。今日の3人の講演者の方々から有意義なお話を聴けるのではないかと楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

**安見** ありがとうございます。続きまして今回の講演会の主旨説明をさせていただきます。七崎桃子さん、お願いします。

**七崎** 本学部ではグローバルな視点から「アジア・オセアニア」、「アメリカ」、「ヨーロッパ」の3つの地域について学んでいます。そしてこれらの学びを深める上で戦争や世界平和というテーマは避けて通れないものです。人々が平和な世界を望む一方で現在も戦争は繰り返され、私たちの生活を脅かしています。日本は、かつて戦争によって数えきれない犠牲者を出しました。しかし当時からまだ78年しか経過していないにもかかわらず、今日、戦争を語る人はどれほどいるでしょうか。

私たちグローバル地域文化学会はグローバル地域文化学部開設10周年にあたり、改めて本学部の理念に立ち返ってみました。以下一部読み上げます。「地球規模の問題はどこか遠い話ではなく、まさしく隣人との関係性のうちにもひそんでいます。すぐそばの隣人と、まだ見ぬ世界の果ての他者と、自己自身の拠って立つ足場とをつないで思考できる想像力。人々の哀しみに感応し、他者と共になにごとかを知ろうとする「良心ある知性」。その実現の困難を理解しつつ、それでもなお希望ある共生社会を構想する高い志」、こうしたものこそが、本学部での探究課題となっていることを受け、メンバーで何度も何度も会合を重ねた末、講演会のタイトルを「戦争体験の継承——哀しみの記憶とあなたの明日」と決めました。

本日の講演会には3名の講演者に登壇していただきます。一人目の講演者は清水恵子氏です。本日はZoomで参加していただきます。原爆投下後の入市被爆者で「原爆の子の像」の建設など、さまざまなボランティアに協力されました。現在は朗読を通して原爆の被害を人々に伝える活動をされています。

二人目の講演者は山田朗氏です。明治大学文学部教授で歴史教育者協議会委員長であり、日本近現代の国家戦略史、軍事史、天皇制、植民地支配、戦争責任の諸問題を中心に歴史認識、歴史教育論に携わられています。

三人目の講演者は藤井光氏です。過去と現代を創造的につなぎ、既存の制度や枠組みに対する問いを綿密なリサーチやフィールドワークを通じて

実証的に検証し、実在する空間や同時代の社会問題に応答する作品を制作されています。

講演の後には講演者と学生委員の意見交換の時間、そして会場のみなさまからの質疑応答の時間も設けています。今回の講演会が、参加された方々にとって戦争の継承について再度、考える機会になることと願っております。最後に講演者の方々より一言ずついただきたいと思います。清水恵子氏、お願いします。

**清水** みなさま、こんにちは。今日は私がちょっと出かけることができませんので広島からオンラインでの参加です。他の先生方は足を運んでそちらにいらしていると思うと少し寂しい気がいたしますが、少し前に実行委員会の方は朗読会に足を運んでくださり、お目にかかっております。今日、みなさんと再会できるのを楽しみにしておりました。私の話をぜひ聴いていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

**七崎** ありがとうございます。山田先生、よろしくお願いいたします。

**山田** みなさん、こんにちは。私は明治大学平和教育登戸研究所資料館の館長をしています。川崎市にある、もともと陸軍の登戸研究所という秘密戦のための研究機関であった場所に生田キャンパスがあるんですね。建物も少し残っていたり、いろいろと語り継がれていることもあります。今日の話は、戦争について可能な限り継承されればいいのですが、えてして忘れ去られてしまう部分、意図的に継承されない部分があるんですね。とくに加害の問題とか。登戸研究所は暗殺用の毒物だとか中国の偽札とかをやっていて、現実には人体実験もやっているんですね。戦争の語り継がれにくい部分です。どうやれば、そういう記憶も含めて戦争の記録が継承できるかということを、みなさんといっしょに考えていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

**七崎** ありがとうございます。藤井さま、お願いします。

**藤井** 普段、現代美術、美術館のギャラリースペース全体を使ったインスタレーションを、主に映像を使った作品をつくっています。そういう中で戦争に関して、これまでいくつか作品をつくってきました。そもそもどうしても戦争の作品をつくるようになったかということ、みなさんと同じ学生の

頃、私は日本ではなく、フランスにいたんですね。フランスの美術大学の授業で「なんでこの学校には黒人がいないのか、それについて議論しよう」と。自分がある教室の空間になんで黒人がいないのか。ほぼ白人、アジア人も私一人くらいです。そこから自分たちがいる空間と、その歴史を考察していく中で、植民地主義に準じた西洋美術が見えてきたり、西洋中心主義の美学体制が見えてきたりする。日本に帰って自分自身が活動する美術や美術史をいろいろリサーチしながら行き着いたのが「戦争」という問題だったんですね。今回のシンポジウムで、実行委員のみなさんが議論してその中で行き着いた先が「戦争体験の継承」だったわけですね。そこには長い議論があったと思いますが、行き着いた先が共通で共有できることが、すごくうれしく思うし、私自身、今日、みなさんに何かしらの参照点を提示できたらいいなと思って、後ほど、話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

**安見** ありがとうございます。それでは本日の進め方についてです。ゲストのみなさまに、それぞれのテーマについて講演をしていただきます。続いて1時間ほど講演者のみなさまとディスカッションをする時間を設けております。前半はグローバル地域文化学部の学生2名と講演者3名によって進めさせていただきます。後半はフロアのみなさまも交えて自由な議論をしていきたいと思っていますので、積極的にご参加ください。また今回の講演会に関するアンケートも用意していますので、お帰りの際にはQRコードからお願いいたします。

## 2. 原爆被害の実相を朗読を通していかに継承しているか

清水恵子

改めまして、よろしくお願いいたします。私は現在、広島市の平和公園の中にある広島市国立原爆死没者追悼平和祈念館で、被爆者の方が書かれた被爆体験記や被爆詩を朗読するという、朗読ボランティアの活動をしています。

また、英語、日本語の朗読グループを立ち上げて、そこではいろいろな限界を超えて活動を広げるために、同じく体験記や原爆詩を朗読し、それを制作し、構成し、自分たちで公演し、他のグループとも制作協力をする、このようなことをボランティアとしてやっている者です。

私は1943年12月23日生まれます。あと2カ月すると80歳ですが、1945年8月6日、原子爆弾が投下された日には私は広島市から80キロ離れた東広島の郊外、田舎の町に疎開していました。しかしながらしばらくして事情があって祖父に連れられ、広島市に入市し、被爆いたしました。今紹介していただきましたが、私は、被爆者手帳を、いろんな事情があって申し込んでおりません。被爆者手帳をもっていない被爆者です。そして今日は、原爆被害の実相を朗読を通じてどのように伝えているか、継承しているか、そのことについてお話させていただきます。第二次世界大戦において最も大きな被害ともいえる原子爆弾の被害、広島や長崎の人たちの体験を、どのように伝えたらいいんだろうと、ずっと考え、実行してきましたけれど、その契機になったことが、どんなことだったかをお話いたします。

それは今から30年前、小学生が私にかけた言葉が契機です。1994年8月6日です。近くに住んでいる小学生に声をかけられました。「おばさん、今日は何のお祭の日なん？ テレビ見たら歌を歌ったり、鳩が飛んだりして、あれは何？」。私はこの言葉に本当にショックを受けました。と申しますのは、私は広島市内に原子爆弾が投下された後、戻りまして、2、3歳の時に。そしてそれから私の20歳までの8月6日は、サイレンが鳴ると8時15分にバスも電車も、ほとんどの乗り物はストップして、運転手さんや乗客は、みんな追悼の祈りを捧げました。銀行も休みでした。市役所や関係省庁はお休みできないところはありませんでしたが、ほとんどの会社、金融関係、乗り物が、8時15分に起きた出来事を追悼し、死者を悼む、忘れないようにしようという雰囲気、まだありました。この子話を聞いて「原子爆弾が投下されて50年も経つと、こんなに子どもたちは何も知らなくなっていく。何とかしなくては」という思いが強くなりました。「何とかしなくては」と思ったのは、私は被爆して後々、いろんな病気をしたり、辛い体験をたくさんいたしました。家族中がそうでした。そのことが一つありますが、まず、この言葉が本

当に私を突き刺しました。

そしてもう一つ「何とかして形にしよう」と動き始めた体験は、子供の時にありました。私が小学校の5、6年の時、代用教員の担任の先生は広島市の爆心地から1.4キロのところで被爆された被爆教師でした。顔にひどい火傷の傷跡とケロイドを残して左半分は写真を撮ることを絶対に嫌だとおっしゃった若かった先生から、担任としていろんなことを教わりました。そしてその先生が「ぜひ参加するように」とすすめてくださったのが「平和を築く児童生徒の会」の発足の会合でした。この会は佐々木禎子さんが亡くなられて3カ月後、1956年1月に<sup>のぼりちょう</sup>幟町中学校で行われた会合でした。市内の小中高の児童会、生徒会の子どもたち、ほとんど集まりました。私は6年生で卒業間近でした。子どもたちの役員が私と同じ被爆者であり、私と、その人と、二人を「この会合に」ということで行かせてくださったんですね。そこで禎子さんの同級生が訴えた言葉が、私たち参加したほとんどの人たちに衝撃を与えました。同時に心を打たれて「この会には私たちもぜひ耳を傾けて参加しよう」と思いました。同級生が「禎子さんは原爆を受けた時は怪我もしないでずっと元気でした。それなのに10年たって白血病で亡くなりました。こんなことは二度とあってほしくないです」と泣きながら語る訴えは、私たち参加した子どもたちに大きな影響を与えました。そこに参加した私も、被爆者だった友人も、「人ごとじゃないよね」と話しながら帰りました。

そしてそれから2年半、「こんなことは絶対ダメ」という思いを強くして「原爆の子の像」の建設活動、募金活動、さまざまなことに参加して除幕式にもかかりました。そして「原爆の子の像」は広島市内や日本国中の子どもたち、世界中の人々が訪れる公園内の代表的な像として、今も「子どもたちが戦争や原爆で二度と犠牲になることがないように。そして大人は平和な世界をつくるために努力してください」という訴えを、ずっと続けている像です。それを形にするために、あちこちの子どもたちが一人ひとり力を合わせたら、こういう形で残って、みんなに訴える力があるのだという一つの例を残しているので、それが私の気持ちを奮い立たせてくれました。

私は最初に「何をしよう、どうしたらいいか」と思って始めたことは、広島市の平和団体「ワールド・フрендシップ・センター」に関係します。これ

はアメリカ人のバーバラ・レイノルズという人が設立しました。ご本人の夫は、ABCCという広島の高田山にある、原爆投下後につくったアメリカの研究機関に勤めるために広島を訪れていましたが、後にビキニでの核実験に反対して、ご夫婦でヨットで太平洋に繰り出すという、とても行動的な方でした。バーバラさんは広島の被爆者が集まる場所を、ということで私財を全部投げ打って被爆者の家をつくります。「ワールド・フрендシップ・センター」といいますが、今も広島に住んでいる被爆者として何人かボランティアとして活動している場所ですが、そこにいた友人が、英語での平和公園のガイド活動をしたらどうかと勧めてくれました。

そしていろいろ、その中で活動を進めていくうちに「外国の人たちだけに英語でやるというのは残念だから、朗読劇のグループをつくって、あちこちを回ろうよ」という友だちがいて、「オリアンダー」というグループをつくりました。ご存じの方も多いでしょうが、夾竹桃の英語名です。ここで朗読劇や創作朗読劇をしました。『この子たちの夏』という劇です。多くの女優さんたちが日本のあちこちを回っていらして、今でも、渡辺美佐子さんとか日色ともゑさんたちが何県かを回って、この朗読劇を続けておられます。私たちはこれを英語でやりましたから、回数も少なくても1年に3回くらい公演することが多かったかと思います。まだたくさんの外国人の方は広島に住んでいられなかったもので、参加される方も少なく、今、私が目になっている広島の平和公園の賑わいはウソのようでした。

そういう活動を二つ続けて「何か物足りないな。もっとしっかり子どもたちに伝える活動ができないかな」と思っていた時に、めぐりあったのが、今私が活動している国立原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティアの活動です。この活動について今日はお話をできたらと思っています。

私が活動している長い名前の国立原爆死没者追悼平和祈念館には、被爆者が書いた原爆被爆体験記と原爆詩が15万件、納められています。すべてが「二度と思い出したくない体験だけど、戦争や原爆の恐ろしさを知らない人たちにぜひ伝えたい。だからここに書いて残します」という思いです。そういう思いで書いた文章で溢れております。追悼祈念館を訪れた人たちの「この思いをしまっておいては勿体ないのではないか。しまっておくことはでき



ないでしょう」という声が大きくなって、被爆から60年経った2005年に朗読ボランティアの公募を始めます。即戦力になるためにアナウンサーとか演劇経験のある人の中から40人が選ばれました。幸い私も選ばれて、この活動をする事になりました。

そこではどういうことを実践しているか。主な対象は修学旅行生や、市内の小学生、中学生です。それから定期朗読会は追悼祈念館に見学に訪れてくださる方にたいして、指定された日に上演します。それから広島市では各地で原爆展を開いています。日本国内だけでなく、世界中に広がっております。コロナで中断しましたが、3年前にはフランスのカヌ、イギリスではマンチェスター、そしてロシアのボルゴグラード、これが2016年までに海外派遣でいった朗読会です。最近では今年6月にイギリスのマンチェスター近くの町で3人のボランティアが朗読に参りました。

そのようにして、あちらこちらに多岐にわたって朗読をしている団体ですが、日本語の場合、この朗読会の原稿は、原爆体験記が19編、原爆詩が25編、原爆体験記のほとんどは、小学校3年生や中学生の子どもが何十年か経って思い出して書いた体験記です。そして『原爆の子』に収められた体験記。『原爆の子』という本は、当時、広島大学教育学部教授だった長田新先生が、みんなに呼びかけてつくられたものです。それらを読んでいます。当然のことながら朗読する際、著作権の許可がいります。家族や遺族の方の了解を得ることも必要です。朗読担当の職員や、たくさんの方の協力が必要で、朗読ボランティアとしての私たちは職員の方やみなさんの力を借りています。

朗読をどのように実際にやっているか。ここで短い詩を読むとともに、「司会の言葉」を知っていただきたいと思います。「おとうちゃん」という詩です。

おとうちゃん      (小学校3年 <sup>かきたよしこ</sup> 柿田佳子)

にぎやかな広しまの町  
そこでしんだ、おとうちゃん

げんばくの雲にのっていったおとうちゃん  
おしろのところでしんだ、おとうちゃん  
わたしの小さいときわかれたおとうちゃん  
かおもしらないおとうちゃん  
一どでもいい、ゆめにでもあってみたいおとうちゃん  
おとうちゃんとよんでみたい、さばってみたい

せんそうがなかったら、おとうちゃんはしなかったろう  
もとのお家にいるだろう  
にいちゃんのほしがるじてんしゃも  
かってあるだろう

以上の詩ですが、この詩の中に「さばる」という言葉が出てきます。「さばる」というのは甘えて、すがりついたり、ぶらさがったりする様子です。今ではほとんど使われることのない広島の方言です。またお城のところで死んだというのは、いうまでもなく広島城ですが、爆心地から1キロメートルのところにありました。そして当時、広島城の広い大きなグラウンドのほとんどが、明治のはじめから軍隊の施設で埋まっておりました。

このように司会は、詩の説明をしながら次々と詩を読んでいます。司会者がいろんな背景を説明したり、たとえば動員学徒という言葉の中身の説明をしたりしながら、当時、戦争中だった人々の暮らしはどうだったのか、制度がどうだったか、それとともに被爆した人の地理的な関係、そのような説明をしますので、普通よりも、もう少し司会の重みがあると思います。

そして同時に朗読会の特徴として、今のような短い詩を参加者に朗読してもらうように呼びかけます。そして朗読していただいた後には、この詩への感想、この会に参加しての感想や意見交換をいたします。多くの参加者から「戦争の怖さがよくわかった」とか「いい企画をありがとう」などの反応がありますが、その一方で参加された方々からの、とても考えさせられる意見や感想に触れることがあります。10年くらい前ですが、アメリカのテキサスから来た青年は「僕は学校の教科書で日本がパール・ハーバーで3000人殺し

たから原爆で3000人殺したと書いてあったように習った。こんなに被害がひどいとは全然知らなかった」と泣きながら話してくださいました。朗読会で私たちが伝えた被爆の実相を、きちっと受け止めてくださったと思っています。

もう一つ、10年くらい前、世羅高校という広島県の高校に中国から留学してきた留学生が、原爆詩を朗読してくれた後で、「原爆が投下されたおかげで私たちの国は自由になったことを忘れないで」、そのように話してくれました。泣きながら訴えました。この言葉を聞いた時、これをどう受けとめたらいいのだろうと、私はしばらく自問自答しました。ご本人には「感想を言ってくださってありがとう」ということで朗読会を終わりましたが、私が心の中でしっかり自分として考えたことは、「日本が行った中国やアジア、太平洋での戦争で、日本は多くの人々に苦しみを与えてしまった。その侵略戦争の結果が、アメリカの原爆投下につながった。この事実を見逃すことはできない」ということでした。この思いを共有しながら、そのようなことをいろいろな人たちと一緒に考える朗読会を今も進めているところです。先程の中国の留学生の言葉、これは朗読ボランティアとして心にしっかりとめおいていかなければならない事実だと思っています。

追悼祈念館での活動は、8月6日当日に、どのように原子爆弾で被害があったか、どのように行動したか、家族はどうしたか、そういうことだけが、ほとんどです。日本は第二次世界大戦までに、どのような戦争をし、日本の国の中で1945年前、直前の本土決戦の中で子どもたちや一般の人たちがどのように苦しめられ、ギリギリの生活をしてきたか。原爆投下後、何年も何年も被爆者が、どういう生活をしてきたか、そのことはほとんど触れられていません。私たちは素材を探して何とか、それを発表する機会をつくりたいということで「PILE」というグループをつくりました。素材研究をして、制作して、上演するという活動を6年間続けてきているPILEの活動です。読み手である私たち自身が、軍都広島歴史や、戦争で侵略行為を行った歴史について、きちんとした認識を深めなければいけないのではないかとということで、いろんな学習を同時に行うことにして、少しずつですが、それをおこなっております。

以上が、戦争を継承する活動の一環としての被爆の実相、これを朗読して活動している私の活動の報告ですが、これからの継承活動で、ほとんど、みなさんが口を揃えていることがあります。今、私は12月に80歳になりますが、他の若い人たちがこれを継承していく担い手になってくださらないということです。学生の人たちは授業がとても忙しい。終わってしまうとアルバイトに行きます。私たちの朗読ボランティアは、ほとんどが70代、60代で占められています。若い人たちが、こういう活動に加わりやすい、いい方法があったらいいなと、いつも考えております。

駆け足のような報告でしたが、これで私の報告を終わらせていただきます。お聞きくださって、ありがとうございました。

### 3. 戦争の記憶の継承——被害と加害、＜表の記憶＞と＜裏の記憶＞

山 田 朗

私の話は「戦争の記憶の継承」ということですが、何のために継承するのか。なんで忘れちゃいけないのか。基本的には「戦争の被害者にも加害者にもならないために戦争の記憶を継承していかなければならない」ということだと思います。記憶したこと、多くの人たちが記憶して残したことは膨大な量があるわけですが、すべてを引き継ぐのは難しいが、「何を、どのように継承していったらいいか」ということで、お話をしたいと思います。

戦後78年という時間が経ちました。明治維新からアジア太平洋戦争敗戦までを戦前としますと、戦前は77年ですから戦前よりも戦後が長くなったということで、それだけ長い時間が経過したということなんですね。敗戦時、10歳以上だった人、ある程度、自分の記憶として戦争というものをとらえられる人として10歳くらいからという線を引くと、人口の3.8%くらいですね。極めて少なくなっている。現代における戦争の記憶の継承の焦点は何か。「非体験者」たち、私たち、みなさんです。まだ体験者でお元気な方もいらっしゃるし、可能な限り、その方々から話を聞いて継承していくこと

が大事ですが、ただ「当時の戦争の話をしてください」というだけではダメなんですね。なぜかというと話したい人は「訴えたいこと」があるんですが、質問が変わらないと新たな記憶が述べられない。同じことを繰り返して話してしまう。それでも大切なことはたくさんあるのですが、ほぼ同じことを話してしまう。もちろんそれにも価値はあるのですが、聞き手である私たち、みなさんが違った角度から質問することで、ちょっと変わってくるんですね。新たな記憶が蘇ってくることは確実に起こるのです。先程の清水さんのお話の中にも中国の方からの質問がありましたね。ああいう問いかけがあることで体験者世代も違った形で答える、それによって新たな記憶が蘇ってくることが確実に起こるんです。

今は「非体験者から次世代に継承する」時代になってきている。私も資料館長ですけど、私の親の世代が体験者です。戦争遺跡の保存、博物館、資料館展示も重要ですが、その中で「何を伝えていくべきか」、そこに思いをめぐらさないといけないということです。私も含めて非体験者は忘れない責任があるだろうと。戦争責任という言葉は大きな概念ですが、直接戦争にかかわっていないが、戦争の記憶を継承していく責任が、私たちにもあるんじゃないかと思います。今日は戦争の「表の記憶」と「裏の記憶」という話からしていきたいのですが、主に「裏の記憶」、継承されにくい記憶を、どう継承していくかというところに焦点を当てたいと思います。

「記憶の継承」というのは、一番基本には親から子に伝える、おじいさん、おばあさんから孫に伝える、私的な継承の部分があり、それが集まって「この時代はこういう時代だったんだよね」という集団的な記憶になり、それがある程度整理され公的に継承されていって歴史になっていくという一つの流れがあるんですが、これだけでいいのか。私的な継承から集団的継承、集団的継承から公的継承に移る際に漏れてしまっていた部分が再現されないといけない。漏れてしまった部分は忘れられているが、その時代を特徴づける記憶の発掘、記憶の再構成、つまり普通に親から子どもに伝えているだけでは伝えない部分がある。伝えられない部分、話せない部分がある。それをきちんと補って初めて「その時代は、こういう時代だったんだ」と、わかってくる。

しかし現在、記憶の継承が非常に希薄になってきていることは確かです。何を、どのように継承していったらいいのかを考えていきたい。

「表の記憶」は、わりと伝わりやすい。私的継承がされやすい。栄光と被害、こんなに立派なことがあったんだとか、軽微な被害については語りやすい。だけど清水さんのお話のように極端な被害の場合、トラウマが癒されるまでに時間がかかる。原爆の体験者で大変ご高齢になって初めて孫に語ったという方もいらっしゃるんです。東京大空襲の証言でもそうです。話せなかったということです。思い出だけで、とても自分の心の整理がつかないことがありますので、極端な被害は逆に伝わりにくいことになります。

「裏の記憶」はどうなのか。語れない記憶。キーワードは一つ、「秘密にされていたこと」、何とんでも「加害」です。話せない残虐行為、実はこういう秘匿を要すること、加害に関しては戦後になっても有形無形に話せない、圧力がかかることがあるのです。しかしこの裏の記憶は、意識的な発見や発掘がなければ消滅していってしまう。誰かが意識的に聞こうとしないと、どんどん語れる人が少なくなってしまいます。何も引き出されないうちに消え去ってしまう。原爆もそうですし、東京大空襲、中国におけるさまざまな残虐行為については、誰かが意識的に掘り出していく作業が、今までなされてきた。教育者、研究者とか若い人たちが、いろんな形で記憶しようと。戦争遺跡の保存も同じです。遺跡は、そこにそれが残っていくことで歴史を想起させる重要な材料になるんですね。

「どのように」ということで、表の記憶の継承については比較的、継承されていることです。「こんな立派なことがあったんだ」という記憶は無批判に継承してしまうと、まずいこともあります。特に戦争の記憶で「勝ち戦だった」という話は尾ひれがついたりするわけですね。それは批判的に継承しなければいけない。被害者としての兵士たちは、どんな体験をしたのかということも、きちんと継承されなければいけないことの一つではあります。戦死という言い方、戦没といわれますが、実際には餓死だったり、病死だったり、とても多い。いろんな推計はありますが、日本軍戦没者230万人のうち140万くらいは餓死、病死だという推計もあるくらいです。代表的な継承の場として靖国神社の遊就館は反面教師的なものとして挙げました。当時

の論理がわかるんですね。これはまさに批判的に見ていかないといけないものですが、「当時はこんなふうに戦争が正当化されていたんだ」ということを見るためには、むしろ、これは面白い施設です。ちょっと事前に学習しておかないと取り込まれてしまうと、よくないのですが、こういう見方もあるということです。

民間人の被害の継承ということですが、これは全く計算上の話ですが、軍人たちについては、アジア太平洋戦争の44カ月間で230万人が亡くなった。平均すると1日あたり1740人も亡くなっている。民間人は本土空襲とかで戦争末期に被害が集中しているんです。戦争最後の10カ月くらいで80万人の人が亡くなっている。1日あたりにすると軍人よりも多いです。戦争末期に民間人の犠牲が多くなったのか、計算上の数値ですが、もっと前にサイパン島とかでも、民間人の犠牲者も出ていたわけですね。あと戦争体験が語られる中で当時、子どもだった人たちの記憶で非常に多く残っているのは疎開の体験ですね。実は地域で受入れた人たちも暗に被害者になっている。労働力が足りない農村に、おなかをすかせた子どもたちがいっぱいやってきて、世話をしないといけない。地域の人たちも大変だったんですね。

「どのように」の第二ですが、裏の記憶、秘匿された記憶を、どう継承するか。秘匿された記憶の典型は秘密戦、スパイ活動とか、謀略、表面に出ないが、いろいろやっている。あるいは天皇がらみの問題は秘匿されていく。誰かが発掘しない限りは、かかわった人が積極的に「私はこんな謀略活動をしました」とは、まず、語らない。しかし忘れられないことでもあるんです。登戸研究所で人体実験をした人がいたんですが、忘れられないんですね。ずっと否定し続ける。そんなことをやったことはない。ところが最後の最後に、その人は遺言書ともいえる自分の著作を出して、その中で最後に「こんなことをしてしまったんだ」と書くのです。その人は原稿を書き上げたその月に亡くなってしまいました。それはまさに加害ですが、忘れようとしても忘れられないものとして、語るに語れないものとして、ずっとその人を戦後苦しめてきたということです。

「発掘と継承」の一例で、陸軍登戸研究所という、秘密戦に関する組織の実態解明の問題があります。当事者は全然語りませんし、公文書として資料



が残ってないので、日本がどんなスパイ活動をするためにどんな兵器を開発したのかということが、1980年代、戦後40年たってから、市民運動、先生と高校生たち、登戸研究所があった川崎の高校生たちが「地域の歴史を調べようじゃないか」ということで調べ始めたのがきっかけで、わかってきたんです。当然、最初は話さない。いろいろと話を聞いていくうちに少しずつ、最初は差し支えのないところから、だんだん恐ろしい話まで含めて話し始める。まずは聞き手が重要でした。放置しておけば消え去る記憶だったところ、若い人たちが違った感覚でインタビューしたことで、記憶が発掘されました。登戸研究所に勤めていた人たちも仲間うちで話す時は「こんなこともあったね」と話すんですけど、決して外部の人には話さなかったんですね。そんなとき、話を聞きに行った高校生たちが、よかったのか悪かったのか、ほんとにそのことについて知らなかったんです。それで「いや、これは語っておかないといけないんじゃないか」と思い始めた人たちがいた。登戸研究所に勤めていた人たちは、戦争のことを語らずに墓場までもっていきこうと思っていた。だけど「話しておかないといけないのではないかと、知っている人間の義務ではないか」と。全部の人ではないですけど、一部の人たちが、そう思い語り始めたんです。

「加害の記憶」は最も困難と苦痛を伴うものですね。残虐行為は、なかなか親が子どもに話せることではない。しかも当時の軍は復員してきた兵隊に箝口令を敷く。「戦地で見たことを家族とかに話すともう刺激が強いから、話しちゃいけないぞ」と抑える。それでも話しちゃう人がいる。地域では、戦前では在郷軍人会、戦後は戦友会が「あの人はなんか話しているぞ」と圧力をかけることがあったんですね。南京大虐殺とか、三光作戦とか、戦時性暴力としての慰安婦の問題とか。慰安所というものは、当時戦地に行った人はみんな知っていることなんです。知っていることなんですけど、語っていない。当時、新聞のカメラマンも写真を撮ってきていますが、絶対、新聞には載せられない写真なので「どうせボツになる」と、そもそも出そうとしなかった。戦後、調べてみたら実は、そんな写真を撮っていた。毎日新聞が大量のデータを戦後まで密かにもっていたんです。敗戦間際に全部「焼け」と命令されたんですけど、毎日だけ、結構残したという経緯があ



ります。

私が登戸研究資料館で体験したことをお話します。南京の1644部隊という、731部隊の姉妹部隊のようなもので、細菌兵器を開発したり、人体実験をやったりしている部隊があります。ここに日本本土にあった登戸研究所の人が出張して行って、暗殺用毒物の開発のために、中国の捕虜の人たちに毒薬を飲ませて殺した。どういうふうに死に至るのかを調べた。なんでそんなことをするのか。毒物の致死量の決定、どれくらい経つと効いてくるかを正確に調べるため、動物実験ではダメだということになって人体実験をすることになった。このことを戦後、証言する人がいた。その資料を展示しています。その時に来館した方は「こんな加害の展示をしたら中国でデモが起きるよ。こういうのは伏せたおいた方がいいんじゃないか」というアドバイスを受けたんです。しかし原爆の話と似ていますが、これは日本と中国における歴史認識の大きなギャップを示しています。つまり日本は、「こういうことを誘発するから隠しておいた方がいいんじゃないか」と。しかし、中国の人たちは、それを問題にしているんです、それに怒っているんです。被害者の怒りは「加害がどういう形で行われたのか」ということよりも「未だに隠そうとしていること」に怒りが向いているわけで、むしろ私たちが加害の記憶を発掘したり、公開したりすることに対しての怒りは、ないんです。確かにそうです。資料館に何度も中国の人たちもテレビも来ました。韓国の人たちも来た。韓国で細菌兵器の散布実験をしているんです。それをこちらが明らかにして「こんなに加害行為があったんだ」ということを発表し、展示することについては怒られたことは一度もない。逆に日本人の来館者が心配することが結構あるんですけど。しかしこういうふうに隠蔽すればするほど「忘却」につながるわけですから、歴史認識上の衝突、ギャップが激しくなる。

「植民地の記憶」というのは、植民地にいた人は確かに少ないので継承されないと思われがちです。ところが日本国内においても、まさに朝鮮半島から連れてこられた人たちが強制労働をさせられている。それをかなり多くの日本人は当時見ているんですが、見て見ぬふりをした。「あんなことをやらされているよ」と思っても見て見ぬふりをした。植民地支配の記憶も国内にあったんです。あったんですが、それは伏せられてきた。今、長野県下で本

土決戦遺跡の発掘が活発に行われていて、これは例外なく強制労働です。中国人、朝鮮人、そして戦争捕虜、この人たちが大変な環境の中で強制労働をさせられた。これを語れる人はいないけれども、遺跡を残すことで将来にその記憶を継承していくことが行われています。

「戦争遺跡保存」ということでまとめますと、戦争や植民地支配の記憶の継承が大事です。地域に刻まれた記憶を、人から人へだんだん伝えられなくなっているけど、「この土地にこういう歴史があるんだ」というのを伝えていくことはできる。明治大学生田キャンパスに通っている学生たちは「戦争なんか全然関係ない」と思っていたのに、同じ場所で、そんな研究が行われていた。まさに戦争研究が行われていて「ひょっとして時代が変わったら自分たちもそのような研究を押しつけられたりするのではないか」と考えたりするんですね。同じ場所で、同じ年代の人たちが、そういう体験をしていたということで「今、生きている自分たちも歴史の中で生きているんだ」と実感する。戦争遺跡、博物館、資料館、継承のための記憶を再構成して、どうしても取捨選択もいるんですが、可能な限り、顔が見えるように「どういう人たちが、そこでかかわっていたのか」ということを残していくことが必要だろうと思います。

「戦争非体験世代」、私も含めて戦争体験者の親の世代にかなり話を聞いたので、まさに伝えないといけない世代なんですけど、どうもその世代がさぼっていた傾向があるんです。「またあの話か」という態度を示してしまったところある。私たち戦争非体験世代、それを引き継ぐみなさんたちにも忘れない責任があるだろう。継承する責任がある。何のために継承するか、被害者にも加害者にもならないために、その記憶を活かしていかなければいけないのではないか、ということです。

関連文献もたくさんありますが、わりと最近出たものがあります<sup>1</sup>。まさに今、強制労働について遺跡の発掘をして、戦時中、どういう人たちが、どんな形で働かされていたのかを地道に調べています。実際に働いていた人たちはほとんどお亡くなりになっていますけど、その家族に中国まで会いにいった話を聞くとか、韓国にいった話を聞く活動をやっている人がいます。そういう形で「記憶を継承していこう」という取組があるのだということ

を、ちょっと知っていただければと思います。

私の話は以上です。どうもありがとうございました。

#### 4. 戦争の記憶をいかにして移民の若者たちと共有していけるか

藤 井 光

今、山田先生からお話になった「戦争の記憶の継承」という問題を私なりに考えてきたんですが、先日、ミュンヘンにあるナチス・ドキュメント・センター所長のミリアム・ザドフさんが来日して、私もゲーテ・インスティトゥートからご指名をいただき、彼女との意見交換会に参加させていただきました。その時に印象に残ったことから話を始めさせていただきます。

ナチス・ドキュメント・センターというのは、ミュンヘンにあるナチス党の本部ブラウンハウス跡地に2015年にできた、比較的新しい施設で、ここでは常設展としてナチスの歴史を展示したり、ナチス占領下におけるLGBTの人たちの生活に密着したテーマ展をしたり、私のような現代美術の作家たちの作品を展示したり、戦争の記憶を語る上での視点と形式をさまざまな形で模索している場所なんです。意見交換の中で「これからのミュージアムやインスティテューションには、どういう未来が考えられるのか。これからは移民・難民の人たちといかに戦争の記憶を共有していくかということが最も重要ではないか」と言っていたのが印象に残りました。

そこには現在の現実社会のヨーロッパの課題が背景にあります。というのも、ナチス政権下における人種主義イデオロギーが、歴史上、とんでもない殺戮とジェノサイドを起こした。当時、その対象だったのはユダヤ人や身体障害者、同性愛者、ロマ族、アフリカ系ドイツ人だったりした。今、その敵対の対象が、移民・難民へと向けられている。かつての加害の記憶を丹念に直視しながら議論し、そしてそれを教育の中に入れこんできたドイツの中では、移民・難民、また政治的亡命、政治的迫害から逃れてきた人たちを受け入れることが、過去の記憶につながる、過去から学ぶ行為として重要です。

それだけでなく、今、ヨーロッパの中では人道主義的な運動の中心でもあるので、どうやって戦争の記憶を継承していくかというとき、「移民・難民の存在は外せない。それこそが今後の多元化する社会に応答するものである」という考えをおもちでした。それに非常に感銘を受けたわけです。

それでは日本はどうか。対照的に難民に関しての受入れは極めて消極的です。それだけでなく、労働者として招き入れたアジアの若者たちを技能実習生という名のもとに酷使する。海外では現代の奴隷制と批判されていますが、そういう制度すら、日本にはある状態ですね。

この作品は技能実習生を含む、日本で学び、働くアジアの若者たちといっしょにつくったもので、『無常』というタイトルの作品です。奥に見える白黒のモニター、4台のプロジェクションがありますが、奥にあるのは戦時中の映画で、台湾で撮られました。タイトルが『国民道場』というプロパガンダ映画です。ここで、もともと日本人ではない人を日本人にする公民化教育が行われていた場所です。移民の人たちと現代の人たちと、その舞台であった国民道場を再現する作品をつくっています。

(映像)

下の画面と完全にシンクロさせて同じようなことをしていきます。そんな映像です。

植民地時代の記憶を今でも人々から掘り下げて聞き取りができるという話がありましたが、もしかしたら別の方法で、植民地時代の記憶が、ある意味、社会に透明な形で残っているのではないかと私には思えるんですね。日本が加害の歴史を直視してこなかったがために、当時の軍国主義的な制圧だったり、植民地主義的な支配、資本主義的な搾取、人種主義的な差別の歴史が、私たちの社会に未だに残っているのではないかと。現実問題としてインターネット上、SNS上ではマイノリティに対するヘイトスピーチが溢れています。京都でもウトロ地区で、「韓国人に対する憎悪を理由に」と被告は裁判でいっていますが、民家を放火する事件まで実際に起こっている。しかし在日外国人に対する人権侵害がこの社会では第一級の社会問題としてクローズアップされることがない。国民的議論になることがない。むしろ傍観や冷笑、ある種の無関心性が際立って見えるのが日本ではないかと。この無

関心性こそが、植民地時代から引き継がれてきた「歴史」というものではないでしょうか。さっき強制労働はあった、みんな知っていたが見て見ぬふりをしてきたという話がありましたが、まさにそういうものが今現在まで生き残って、日本の戦後社会は、物質的に近代化はしたかもしれないが、決してポスト・コロニアルの時代は迎えられていないというのが、私自身の見る日本社会像なんですが、「それはどうしてなのか？」と考えざるをえない。

1945年8月15日、天皇が「日本の生存とアジアの安定を確保するために戦争を開始したのだ」と日本の戦争行為を肯定して戦争を終えたことによって、戦争をめぐる歴史認識の問題、戦争体験の継承という問題が日本社会のど真ん中にちゃんと据えられなかったのではないかと思うんですね。

そして戦争体験の継承は幾度とも困難をめぐるのですが、清水さんが1995年に子どもが広島の実験の記憶がなかったことで自分自身の活動を始めていったという話があった。1990年代は歴史の継承をめぐるいろんな問題が起きていまして、歴史修正主義者も台頭してくるわけですよ。その中で、これは戦争体験の継承がうまくいかなかった一つの例ですが、東京大空襲を継承するための東京都平和記念館というミュージアムの建設が構想されたんですよ。しかし、つくられなかったんですね。なぜつくられなかったかというと、展示のキュレーションが、最初が日本軍による中国・重慶への空襲場面、その歴史展示から始まって、最後に東京大空襲につながる展示構成だった。「アジア侵攻があったが故にその帰着として東京大空襲が起きた」というストーリーを描いたことが、自虐史観に基づくものということで政治問題化して、この博物館の構想が凍結されて、できなくなってしまうんですね。その結果、東京都平和記念館開館に向けて集められた5000点余りの戦災資料、遺品も含め、300人の体験者のインタビューは、今も都内の美術館にひっそりと保管され、私たちは見ることができない状態です。

この動画はその問題を改めて問い直す記録として『爆撃の記録』という作品をつくったんです。その制作風景です。東京大空襲の体験者たちに参加していただいて、建設予定であったミュージアムのために収集された遺品や戦災資料の実物は取り扱いできないので、キャプション（説明文）だけを展示していくという作品になっています。この写真が完成されたもの。ここでは

直接的なメッセージを発するのではなく、見えないもの、見えなくされたものの、その不在を通して観客の想像力に賭ける、想像力を信頼する作品なんですね。なぜ直接的にいけないか。これはまだまだ政治的に熱い問題で、公的な美術館で、その問題を直接に取り扱うのは難しい。未だに政治の中核に「自虐史観だ」という人たちが大勢いますのでね。美術館の自主規制という名の検閲をくぐり抜けないといけない。観客の想像力に賭けるという芸術のアプローチは、何かしら戦争体験の継承に貢献できることがあるかもしれないと私自身は思っているんですね。戦争体験という壮絶な体験を非当事者が想像することができないのは当然、わかっています。それでもなお知るためには、想像しないと知ることはできないのではないかと。本を読んで知識を蓄積するのは違う、感性的な、感情的な経験を通してです。芸術作品は「歴史の情報化」ではなく、「歴史の記憶化」に関与する体験なのではないかと私は考えています。

人類は少なくとも6000年前から戦争を描いてきている。戦争を記憶化させようという思いから。ここで注意しなければいけないのは、さっき少しか台湾のプロパガンダ映画を見たように、戦争の記録・絵画・絵図というのは、おもにそこに参加する人たちの虚栄や栄光など、そもそもがある種の暴力の正当化であり、「勝者のもの」なんですね。勝者のものは常に敗者を永続的に侮辱するオブジェになる。そんな野蛮な記憶であることを念頭に入れつつ、第二次世界大戦において多くの著名な日本の画家たちが、戦争画を描いています。でも私たちは戦争画についてあまり知らないんですね。その戦争画にはアジア侵攻が賛美され、正当化されて描かれているわけですが、それを見ることができない。私たちに記憶化されていないのは、日本が敗戦して負けたからです。戦後すぐにアメリカ占領軍は日本の非軍事化に伴い、戦争画を接収していきます。そして旧東京都美術館に集めていきます。この時のGHQの公文書を歴史家といっしょに探索しながら調べていくと、アメリカは、接収した絵画がプロパガンダならば、占領軍の方針で破壊するが、しかし芸術作品だったらGHQの規定で残さなくちゃいけない、そして戦利品となれば他の連合国と分けないといけないことに逡巡します。そこで日本の戦争画の価値を見積もるために、旧東京都美術館で展覧会が行われました。

日本人は立ち入りが禁止されたのですが。私の作品は、それをもう一度、現代に再構築するものです。実物の戦争画はないんだけど、当時の資料をもとにタイトルと作者名、接收された絵画と全く同じ実寸大の同じ大きさのものを、もう一度、再制作してつくりました。

日本の戦争画を考えた時、実際に図像がないのはどういうことか。戦争画を封印して、それを見つめて考えて議論をしなかったんです。その背景には、アメリカがそうさせなかったという部分もある。日本の記憶形成の歴史の問題にはアメリカが多く関与しているので、それも掘り下げないといけない。歴史修正主義はある意味本丸ではなく、もっと掘り下げると冷戦に突入するアメリカ占領軍の政策が大きくその後の日本の未来にかかわっているのですが、それは置いておいて。

ここでもう一つの本題として、このオブジェをつくったのは私ではありません、日本の社会に存在するが存在しないものとして、「望ましくない外国人」といわれている難民の若者たちが、このオブジェをつくっています。その中の一人は、ほぼみなさんと同い年です。13歳で日本に来て、中学、高校に行き、18歳になったある日、入管施設に突如収容されます。3回目の難民申請が通らなかったからです。ただコロナで、その対策として一時的に外に出ることができ、私はその時に会っているんですが、彼自身は第三国に行くこともできない。他の都道府県に移動することも許可制で、大学にも行けません。仕事をすることも許されていない。彼らの言葉でいえば「生きながら死」の状態です。そういう彼らを前に「自分は何ができるか。アーティストとして何ができるか」と考えた時、何もできないと無力さを感じました。若者たちは自分たちの行き着く先の未来も考えることができないんですよ。彼らの未来を奪うのは、ほんとの人権侵害だと思います。彼ら自身の表現の自由を考えながら、この作品ができてきたんですね。

どういうふうにしたか。自分は制作する材料を調達したり、製造したり、運搬したり、統括する監督なので、そのプロセスのあり方を見直して再配分の仕組みを考え、彼らがものをつくる仕事場をつくったんですね。美術館から出る廃材とか作品を運送する時に使う梱包材を、トラック5台分くらいその場所に集めて、それを若者たちが自分自身で工夫しながら切り貼りして組



み立てたのが、これらです。大変でしたが、最後に美術館のクレジットの中に彼らの名前を載せて展示したんです。いつも難民、移民といわれ続けてきた属性から、彼ら自身が自由になれた瞬間だったらいい。私も一人の友人として、プロフェッショナルのパートナーとして、すごく喜びを感じたわけですね。

しかし今日、現在も彼らの状況は全く変わらず、入管法の法改正によって、さらに厳しい状況に陥らざるをえない。彼らの人権を奪う入管法、これも歴史をたどれば旧植民地者の管理や抑圧、過去の人種主義に基づく刑法に由来しています。植民地の時代の過去からずっと構造化されているものに彼ら自身の未来が奪われている。これを解放するには、戦争の記憶というもの、戦争体験の継承の問題を、民主主義社会の核心部分、中心部分に置き直す必要がある。そうしないと在日外国人に対する関心は全然起きてこない。無関心性は、すでに忘却された植民地主義の歴史にあった。それは制度として、ずっと位置づけられてきた。今後、我々が多様な人々と生きていく未来、今は、そういう時代ですよ。そういう中で新たに戦争の継承という問題を移民や他者の視点から考えて、もっとよりトランスナショナルな記憶として置き換えていく時代を、みなさんが、ぜひ、つくりだしてほしい。私も、いっしょにつくっていったらな、と思っています。

ということで私のお話は以上です。ありがとうございました。

## 5. ディスカッション

**安見** これよりディスカッションに移りたいと思います。実行委員からの質問と、それに対して講演者と議論をしていきたいと思います。後半ではフロアからのみなさまのコメントや質問も受け付けたいと思います。それではアメリカコース2回生の川西さんと、ヨーロッパコース1回生の松井さん、よろしくお願いします。

**川西** 3名の方々からの貴重なお話、とても勉強になり、ありがとうございました。戦争の歴史を継承する過程において、私的、個人の語りから公的



なものへと移りかわっていきます。モニュメントだったり、博物館だったり。そのように置き換えていく上で影響力はもちろん大きくなっていきますが、「記憶の再構成」も起こります。そこで認識のずれや修正が加えられていくと考えています。それを踏まえて「後世に記憶を正しく伝える」という点で、3名の方から「正しさをどのようにとらえ、また実践していくべきか」について、お考えを聞きたいと思います。よろしく願います。清水様から願います。

**清水** もう一度、お聞きして間違いがないかということで。記憶の再構成が行われる場合、正しく伝えるにあたって、正しさをどう実践するか、どう捉えていくことができるか？という質問でよろしいですか？

**川西** はい。間違いはないです。

**清水** 私が今、実践している被爆体験記の朗読で依拠しているものは、被爆者が書かれた体験記なんですね。平和公園の中にある資料館も含めてなんですが、被爆者が記憶し、それを私たちに伝えてくださる、言葉でも書いたものでも同様ですが、そこは本当にあった事実として私たちはとらえるべきではないかと。実証のしようがないことではあるので「正しいか、正しくないか」という判断はしていないのですが、実際の記憶や記録に寄り添って、それを私たちが、どう受け取るかは、それぞれの自由であると、捉え直しをやっていきます。読んでいく場合、その人が書いて残した体験そのものが、その人の感性、感覚として間違いがあるか、間違っていないか、どこがおかしいかということは、それは考えない。そのままを受けとめることが、私が今行っている伝え方の中にあるものです。

**松井** ありがとうございます。私も実際に広島に行って清水さんとお会いしましたが、ありのままの体験を、ありのままに話していただく、自分としても、その人の感情が直接、伝わってくる感じがして。一番印象に残りやすいのは「感情」だと個人的には思っていて、それを伝えていくべきだし、ただそれだけを知るのではなく、それが自分の知識を広めるきっかけにもなると思いました。では次に山田様から願います。

**山田** 歴史や記憶を再構成する時の正しさは何を基準にしたらいいか。「その時、その時の正義」を基準にしてしまうと歪んできちゃう。まさに戦争

というのは、それぞれの掲げる正義の衝突であるわけですから。ここは、何を基準にするか、何が守られなかったのかを明らかにしていく、「人権」や「個の尊重」を基準にして記憶や歴史を再構成していく、それが人類の発展の歴史の一つだと思うんですね。まさに今は人権や個が尊重される時代であるのに、その最大の否定の産物である戦争が行われしまう。しかもどんどん残虐に。残虐でない戦争って、もともと歴史上ないのですが、それがシステマティックになり、資本主義社会になって巨大化していくという。それでもそれは克服すべきものとして私たちは位置づけていく。その基準になるのは人権と個の尊重。それをきちんと見ていかないと歪んだ正義の押しつけになってしまうのではないかという気がします。

**川西** ありがとうございます。その時々正義に頼るのではなく、個の尊重という基準、つまり戦争というのは国と国の戦いで、国はそれぞれ正義をもっていますが、個の尊重、人権は世界基準です。その基準のあり方を、もう一度、再確認する機会をつくれたらいいなと考えます。では藤井様、よろしくお願いします。

**藤井** 私自身は歴史を扱う時に自分だけでなく、常にプロフェッショナル・パートナーとして歴史家と仕事をするんですね。実証主義的な史実とはどういうことなのかを押さえた上で、エビデンスを押さえた上で、じゃあどうつくろうかという二重構造で、いつもつくっています。アーティストは、どちらかというと、いわゆる正義といわれるものの正当性、人権であろうが、民主主義であろうが、その価値体系を問い直す役割があるんですね。おそらく「これが正義である」という答えが出されたら、その答えに乗って「消えてしまった問い」を掘り起こすのがアーティストだという立場なんですよ。他の異分野の人たちにとってアーティストは、もしかすると厄介かもしれませんが、そういう人たちと協働しながら、この社会の問い直しに参加できたらいいなと思っています。

**清水** 先ほど申し上げた正しさなんですけど、たとえば被爆証言をする人は、一つのイデオロギーをもっている人と、そうではない人では、伝える事実については被害そのものなので大変だったということなんですけど、その後のメッセージについては、私たち聴く方が、それを判断しなければならな

い価値観が出てくると思います。一つ例をいいますと被爆者の中で「こんなに大変な目に遭った。戦争は勝たなければならぬんだ」というメッセージを子どもたちにしていられっ方もいます。そういう意見についての判断は、私たちにありと、お話を聞きながら思いましたので挟ませていただきました。

**川西** ありがとうございます。我々がこういう企画をしましたのも、違う三分野の方々にお話を聴いて、我々が今思っている戦争に対する価値、戦争の捉え方の価値基準を考えてみようというのがありました。固定化された価値基準が、今はびこっている可能性がある。それを壊すために我々はこのような企画をつくりました。みなさんが今回、この企画を通して、それぞれの「戦争体験をどう継承していくか」を自分自身に問い直して明日につなげていってくださればと思っています。これよりフロアのみなさまからご質問をいただきたいと思いますが、いられっやいますでしょうか。3名の方々にマイクをお渡しします。

**フロア1** 貴重な参考になるご講演をありがとうございました。山田先生に記憶の継承という点について。もちろん「裏の記憶」もあり、それを引き継いでいかないといけないという姿勢は大切ですが、と同時に当事者への搾取という点が気がかりで、記憶の継承を大義名分にすることによって、ある種、当事者の人たちに「語らせよう」という構造ができあがってしまっているのではないかと。トラウマというものは本人が処理しきれないのであるからこそトラウマであるわけで、それを他者が、その人の生に土足で入るような形で搾取することで、当事者が置き去りにされるのではないかと。それを踏まえても「私は語りたい」といわれる方がいられっやならば、それでいいと思います。記憶の継承ばかりが先に出てしまい、当事者が置き去りにされてしまうのではないかと僕は思うんですが、その点についてどのようにお考えですか？

**山田** 大変、重要なお指摘です。当事者に、どういふことを語ってもらふのか。私は問ひかけの仕方で、いろいろ記憶が蘇ってくるという話をしましたが、よくあるのは誘導してしまうということ。こういうことを聞き出したいから「こうですよ」という形で聞き取りをするのが、わりと起きる

んです。そうすると同じ人が、聞き手が代わると違うことを語ってしまうことが実際に起きるんです。お話をされる方は話を聴く人に喜んでもらいたいという意識がある。いろいろとお話をされるんだけど、聞き手の方が、予めストーリーをつくって「こうですね」とパズルに当てはめるように証言をつくっていってしまう。言葉自体は間違いじゃないが、それを語るにあたって多くの別の部分があるはずなのに、それを無視した形で、都合のいいところだけをピックアップしてしまう。基本的に証言は証言される方の内発的なものでないといけないくて、その内発性を引きだすのも聞き手の技術ではあるんだけど、予め自分でストーリーをつくり過ぎてしまうと、結局、証言者の意に反することであったり、「ほんとはここを強調したいのに違うところが強調されてしまう」ことが起きるんですよ。これはオーラルヒストリーの陥りやすい大きな問題点で、現実に県史を編纂して、一人ひとり証言してもらったら、かつての県史と違うことを言っていることが起きてしまった事例がある。それは聞き手の、ある意味、誘導があって、結果を出すことに焦りすぎると、そういうことが起きてしまう。歴史研究者も慎重に反省しなければいけないところだと思います。

**フロア1** 「相手をデータとして扱うのか」という問題かなと思いながら伺いました。ありがとうございます。

**フロア2** 私は自らを「歴史修正主義者ではない」と自覚していますが、しかし戦争の継承については自虐的史観が往々にしてあると考えています。というのも先の大東亜では我々の血のつながった人が戦っていたわけですし、戦争のとらえ方は人の思想、信条に基づくところがあると思います。その上で我々の世代は「先の戦争については関わりようがなかった。我々が投票した最高指導者が戦争を起こしたわけではない」と考えることが、事実の直視ということだと思いますが、日本人としての反省と責任については限りがあると考えています。戦争犯罪者の子孫が犯罪者というわけにはいかないので、その上で、たんなる「自虐的史観」とは一線を画した上で正しく継承する方法にはどのような方法があるのか、お考えをお聞かせ願いたいです。

**山田** まず私から一言申し上げますと、「自虐的である」というのは、どう

いう意味合いなのか。よくあるんです。加害の問題をとり上げると「それは自虐的である」と。自虐的というのは実は何も生み出さないんですね。将来に活かすための反省があるかどうかというところが重要であって、反省は次に新しいものを生み出しますよね。他国の人たちとの新しい関係性を生み出す。自虐は何も生み出さないが、反省という立場に立てば変わってくると思います。自虐的であるという批判の仕方はいくつか本質をすり替えているような感じがしてしょうがないんですね。自虐史観という言葉が、かなり蔓延して、私も学生の企画に呼ばれて「それでは自虐史観を代表して山田先生、お願いします」と紹介されて「そういう立場でやっているのではないんです」と。自虐史観というのが加害を強調する人たちの代名詞になっている部分もありまして、そういう立場で歴史教科書を書こうというグループもあり、自虐史観批判という形でやろうとした人たちもいる。彼らがやろうとした教科書は、たいして採択されていないけれども、だけど自虐史観批判が強く出たので、まともな教科書までが自主規制して、加害について書かない傾向を生み出してしまったというところがありますので、自虐という言葉がもっている言葉自体の影響力は侮れないものがあるなと思います。自虐であるか、ないかというレベルで議論するのは、あまり生産的な感じがしないですね。

**藤井** ちょっと別の視点から。日本の植民地主義の歴史、加害の歴史を扱った作品をいくつもつくって主に海外で発表しています。むしろ海外からのほうが呼ばれます。そこでは私自身が個人として海外とのネットワークをつくることできる。さきほど、そういうことをすると中国の方が評価されるという話もありました。しかし評価される時に気をつけないといけないのは、日本に苦しめられた被害者たちにもナショナリズムというのがあったりする。下手すると私自身の活動が、そういう排外的な民族主義に使われる可能性もあるんですね。「良心的な日本人」という名のもとに。これは私自身、気をつけないといけないと思っていて、その民族主義にも、どう批判的に距離をつくれるかを考えるんですよ。そういうことを考えると、実際に頭の中で私自身が構想してつくるなんてことはできないんですよ。つまり私は韓国、中国、香港とか、また別の地域のプロフェッ

シヨナル・パートナーが必要となるんです。それは、私自身にはわからない現地の民族主義の暴力とか歴史をよく知っている、そこに批判的な人たちがいるわけだから。トランスナショナルな複層的なネットワークを組んで、全方位的に批評的な歴史を構築する可能性も、芸術の分野において、今のところ少しは見えるかなと思います。今、歴史分野では收拾がつかない闘いが起こっているみたいですけど、芸術においては、そういうネットワークが、今、構築されようとしているかなと思います。

**フロア2** 1点だけ山田先生に。責任ということについて。一般的に人として戦争がいけないというのは普遍的な責任であるのか、あるいは、日本人として我々の血のつながった人が戦争に加担したという意味での責任ですか？

**山田** 過去に侵略戦争をやってしまった国家の構成員であることは確かですね。次の世代も戦争犯罪者だということではなく、逆に、それを自らの力で変えることができるわけですね。つまり過去の歴史から学んで、それをきちんと継承して、過去の歪みを自分たちの代で少しでも正すことができるという存在だと思うんですね。無条件にずっと罪を背負っているということではなく、それをプラスにしていける、それが次の世代の存在なんだと私は、いつもとらえています。

**フロア2** ありがとうございます。

**フロア3** 先日、個人的に広島に行く機会がありまして原爆資料館に参りました。見て感じたことがありました。大きなモニュメントの前や原爆ドームの前で集合写真を撮る。カメラマンか教員か、わかりませんが、ポーズとか笑顔を求めたりして。原爆資料館の中に入った時、人がたくさんいて、日本人も外国人たちもいて「これだけ人がいるんだな」と感じたんですが、最初の方は展示のコーナーで実際に原爆が落とされた時の白い煙とか衣服とか、当時の人の死が象徴的に展示されている。その後、過去の映像ですが、被爆者の方のインタビューを映像で流すコーナーがあり、そこは一定数入れるスペースがあったにもかかわらず、中継にあるインタビューのコーナーをスルーして誰もそこを見ずに次の展示コーナーに行っていた。もちろん誘導で「こっちにもコーナーがあります」と言うにもか

かわらず、ほとんどの人が行っていないことがあって。このような体験に加え、今、流行りの戦争のゲームや映画などを踏まえたうえで、原爆体験や戦争体験の継承を現代でするにあたって、エンタメの要素から逃れられないのではないかと感じています。正しく公的に伝えるというのはあるんですけど、エンタメの要素から脱却するのは難しいのではないかと感じてしまっ。原爆体験、戦争体験の継承にあたってエンタメという要素から脱却する必要があるのかどうかについてお聞きしたいと思います。

**清水** 「どのように、何を」というのが、ちょっと私の方ではとらえにくいのですが、広島資料館、祈念館でボランティア活動している者として、エンタメの要素を具体的にどのようにとらえて、お感じになりましたか？

**フロア3** 原爆ドームや、飾られているたくさんの折り鶴とか、資料館の中にある展示された有形物とか、それをエンタメというのは言い過ぎかもしれませんが。それに違和感を覚えて、ゲームとか映画とかの話に及びました。もとをたどれば象徴としてのモノを、大げさにいうと「エンタメ」ととらえています。

**清水** 何年か前に資料館が改装されて新しい展示の仕方になって、時々、若い方からも年配の方からも言われますし、私自身も、展示の仕方がガラリと変わってしまったと感じます。ボタンを押すと画面が出てきて、戦争映画にも出てきそうな画面展開になっていて「爆弾で、こんなに変わりました」と。それが表しているものの下に「人間」が、いないんですね。私が新しくつくられた資料館の現状を見た時、それに私はがっかりしましたけれども、本当は、改装前には絵や写真で実際に被害を受けたホルマリン漬けの手や皮膚とかがありましたが、それが少しずつ、「こげれい」という言い方で表せるくらい、見る方に「痛み」を訴えることがない映像が、次から次に映し出される点について、私自身も少し、疑問をもっています。これはつくった人たちの感覚だと思いますが、若い人たちが機械を操作して見ることに慣れていることで「このような展示にしよう」と考えられたことが一つだと思います。そしてその中で実際に自分たちが何を知らなくちゃいけないか、何が欠けているかを裁きながら見てくださるのがいいのかなと、今、聞きながら思いました。蟻のように十何万人も一瞬にして殺



された画面は実際にあったことなので、それは表しようがないけれども、そこを想像できる素材を、人間はそこにいたよと想像できるようなものを私たちはもう少し提示すべきだと。これが平和公園の中でボランティア活動をしている私たちの役割だとも思っています。

それからもう一つは、先程、中国人の留学生の方の「原爆投下で自分たちは自由になった」というのがありましたが、「日本への原爆投下の歴史は日本の戦争の歴史の最終的な結果だった」ということが、今までは歴史的にみんなの目に当たるように展示されていましたが、それが新しくなってボタンを押さないと、それが出てこないように変わっております。そのへんが、資料館自体何を伝えようとしているのかがわかりにくいなと私自身も思っています。今のような意見があることを頭に入れながらボランティア活動の中で、改善できることをやっていけたらと、聞きながら思いました。大勢の人たちの知恵と声と「こうあるべき」という提案があったら、それを出していくべきだということを伝えていくことだなと思いました。

**フロア3** ありがとうございます。

**藤井** 「知るためには想像しなればいけない」ということを今日、話したと思いますが、エンターテインメント的なものって想像力をあまり必要としないものだと思います。情報化された情報を処理するという形になってくると思うので、果たしてそれをもって「知る」という経験になっているのかどうか、よくわからないですね。そこは考え直さないといけないなと。一方で私は海外が長かったので、日本のエンタメ好きの観客に合わせると世界の「グローバル基準」からはずれてしまうのではないかなと思うんですね。グローバル基準から見ると日本のエンタメは「デジタル・ネイティブ世代」といわれますが、ちょっとずれを感じています。広島原爆という、人類史に残るものが、ローカルな日本の若者に合わせていくべきなのか、もっと「世界基準」の別のものに合わせていくかどうかで、演出も変わってくるのではないかなと思います。僕は広島の展示を小学生の頃から何回か変遷を見てきていますが、「今、こっちに舵を切ったんだな」と、わかるころがあって、それはちょっと疑問があると。いいところは今の



展示で「市民が描いた原爆の絵」が数多く観られたりする。そこは評価している部分ではあります。

**山田** これも歴史教育や博物館の大きなジレンマですが、原爆の実相、日本の加害の問題を考えてもらいたい、だけど、それをあまりにストレートに出すと引かれちゃうんじゃないかという危惧が、常にあるんですよ。たまに歴史教育に熱心な先生が「こんなに加害があった」と話をすると「そんな話、聞きたくない」というのがあったりするんです。自虐の問題にもつながるかと思いますが、だけど直視しないといけない問題があるはずですが、えてして逆に歴史嫌いをつくってしまう。歴史教育に熱心な先生は歴史嫌いをつくっているのではないかという言い方もある。博物館の展示でも「入り口論」といいますが、入り口、とっかかりの部分をもっとソフトにしないと入ってきてくれないというのがあります。あまりにもストレートなものばかりだと、見ないで帰る自由もあるわけですから、そういうことも起きるんですね。それとの闘いでもあるんです。歴史教育や資料館、博物館はハードルを下げようとしてエンタメ性を強めに出すと、肝心なものがガサッと落ちてしまう。そのバランスが難しい。ちょっとはソフトにしたいところですが、だけど、あまりそればかり考えると、結局、資料館、博物館のアイデンティティは何だということにもなりかねないですよ。そこは正直いって私もちゃんとした答えをもっているわけではないですが、なるべく多くの人に見てもらいたいという思いはあるんですね。入るや否や足が止まってしまうのはいくらなんでもと思うんですけど、たまには二度と見たくないような企画展も必要なのかな。それは歴史の実相であれば仕方がないというか、実際、どんなに描いたって原爆を悲惨でないものには絶対できないわけですよ。そういう点で腹の括り方というか、そういう問題なのかなと思います。どうしても来館者数を増やさなきゃというのは必ずあるんですよ。でもそれに負けてしまっただけいけないのかなという感じがします。迷っているということです。

**安見** ありがとうございます。それでは時間がまいりましたので自由議論を、これで終わります。最後に閉会の言葉をお願いします。

**七崎** 学術講演会は以上をもちまして閉会とします。講演者の清水恵子氏、山田朗氏、藤井光氏、また参加された方々、運営に携わってくださった方々にグローバル地域文化学会を代表しまして御礼申し上げます。このたびはご多用な中、グローバル地域文化学部学術講演会にご参加くださいまして、誠にありがとうございました。すばらしい時間を過ごせたことに敬意と謝意を表し、閉会の言葉とさせていただきます。本会の講演会を通して、みなさまに戦争に対する関心をもっていいただければ幸いです。(拍手)



講演会当日の様子

## 追記 広島へのエクスカーショ

学術講演会に先立って、2023年9月2日、実行委員会メンバーの七崎桃子、藤原花妃、松井琴菜、渡辺文で広島へ赴き、講演者の一人である清水恵子氏を直接訪問する機会に恵まれた。はじめに訪れた広島平和記念資料館では、原爆投下後の広島の写真や、持ち主の名前が書いてある物品の数々を目の当たりにし、一人ひとりの尊い命が失われた現実を改めて痛感した。その後、原爆死没者追悼平和祈念館で開催された朗読会へ参加した。清水氏らの朗読を拝聴するとともに、実際に自分たち自身でも朗読を体験することで、被爆者の言葉を後世に継承していく責任について改めて考える機会となった。ま

た、清水氏に案内していただいた平和記念公園では、清水氏も建設に携わられた原爆の子の像や慰霊碑を回り、二度とこの惨劇が起きないことを祈り一同で慰霊碑に手を合わせた。

広島街並みには原爆ドームのみならず、当時被害を受けた小学校等の建物が現在も残されており、現地の人々の当時の記憶を継承していこうとする思いを感じた。それと同時に、戦争の傷跡は日本にあるが、広島で起きた出来事は日本固有の問題ではなく、世界共通の歴史として捉え継承していかなければいけないと感じた。



原爆ドーム前にて。右から2番目が清水恵子氏。

### 注

- 1 長野県強制労働調査ネットワーク編、山田朗監修『本土決戦と外国人強制労働——長野県で働かされた朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜』高文研、2023年

～哀しみの記憶とあなたの明日～

場所：同志社大学



18:00 閉会

